

觀經變について

——敦煌莫高窟第二〇九窟を中心として——

釋 舍 幸 紀

一 問題の所在

西方浄土に生まれたいと願った人々が、『無量寿經』や『觀無量寿經』に説かれている極樂世界を求めたことは、これまでの諸学者の研究によつて、よく知られている⁽¹⁾。往生思想にかかわることをシンボライズする重要な要素をもっているが、その特性は『無量寿經』が救済法の真実を説くのに対し、『觀無量寿經』は救いの対象である人間の真実を説くところにある。

親鸞は『教行信証』総序において、「しかれば浄邦縁熟して調達闍世をして、逆言を興せしむ。浄業機あらわれて、釋迦韋堤をして安養をえらばしめたまえり」と言つたごとく、韋堤希や阿闍世などが王舎城を舞台にくりひろげられた悲劇の人生模様を機縁として、阿弥陀仏の救いの真実をすすめている。西方極樂世界に生まれたいと願つた人々が、中国や日本でも数多くあつた。既に諸学者の指摘しているところだが、

中国の唐時代をみればよい。西方願生者が数多く輩出したことをもつても窺い知られる。その中、中国の浄土教の第三祖にあたる善導大師は、『觀無量寿經』（以下、『觀經』と略す）にたいする見解を慧遠や吉蔵をどの天台系の諸師と異なる立場を示した。曇鸞大師や道綽禪師に求め、その流れを集成した。

彼の『觀經』に対する見解は、『觀無量寿仏經疏』（以下、『觀經疏』と略す）四卷のそれぞれの巻に詳しく述べられている。その内、「玄義分」には『觀經』についての理解を総括的に述べており、「序分義」・「定善義」・「散善義」には、それぞれ經文についての彼の解釈をほどこしたものであることがわかる。その帰結をいえば、惡を重ねなくては生きられない者でも、阿弥陀仏の救いを信じて、念仏をとなえる身となれば、仏のさとりを得られるということになる。つまり、惡人凡夫の称名念仏往生を説くことであつたと、言つてよいだろう。

周知のように、『觀經』に説くところの阿闍世・提婆・頻婆沙羅・韋堤希らがひきおこした王舎城悲劇の物語は、鎌倉時代に興起した新仏教の祖師たちに共通した問題であつたと思われる。たとえば、日蓮は『開目抄』の中で、韋堤希が『觀經』の中でいった、「私宿^{むかし}何の罪があつて、此の惡子を生む。世尊よ、復何等の因縁あつて、提婆達多と共に眷屬たるや」という問をかけた、それに答えるという形で自身の思想を展開しているし、道元も『鎌倉名越白衣舍示誡^③』の中に、『涅槃經』から阿闍世物語を抜き書きしている。

親鸞自身も、『教行信証』の「総序」にいう分だけでなく、『信卷』にも『涅槃經』の阿闍世物語を長く引用している^④。この經の内容もさることながら、「化身土卷」や『觀經和讃』からうかがえることではあるが、『觀經疏』に対しても、特に注意をはらっている。直接的には「証卷」の中に、光明寺の疏に云くとして「玄義分」の

言弘願者。如大經說。一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀仏大願業力爲増上縁也。又仏密意弘深。教門離離。三賢十聖弗測所闡。況我信外輕毛敢知旨趣。仰惟釈迦此方發遣。弥陀即彼國來迎。彼喚此遣。豈容不_レ去也。唯可_レ勸心奉法華命爲_レ期。捨此穢身。即証_レ彼法之常樂^⑤。

という文を引用して、仏の増上縁によつて極樂へ生まれることを説き、ついで二尊の喚遣と常樂の証を示している。続い

て「証卷」に、又云くとして「定善義」の文、

西方寂靜無爲樂。畢竟肖遙離_二有無_一。大悲薰_レ心遊法界^⑥。分身利物等無_レ殊。或現神通而説法或現_二相好_一入_二無余_一。変現莊嚴隨意出。群生見者罪皆除。又讃云。歸去來。魔鄉不_レ可_レ停。曠劫來流_二転六道_一尽皆經。到处無_二余樂_一。唯聞_二愁歎聲_一。畢此生平_二後_一。彼涅槃城^⑦。

を引用して、西方願生の心情を披瀝しているのである。

このことをふまえたうえで、『觀經』の組織をみていくと、慧遠等の天台系の解釈によれば、正宗分に示す「弥陀仏国土觀」の十三觀と、「九品往生人觀」の三觀とをあわせた十六觀の説法全体が、韋堤希の願に答えるものとして、釈尊が説示したものとみなしている。つまり、淨土の美しい相や九品の往生人が淨土に生まれてゆくすがたを、自身の心にしずめるだけでなく、觀察するための觀經を説いたものであると考えた。

塚本善隆博士の説に従えば、『觀經變』は中央の淨土図を囲む左右の両縁あるいは左右下の三縁に、『觀經』の序にあたる王舎城の悲劇、韋堤希によつて望まれた十六觀の描写は、よく理解できるという^⑧。しかしながら、敦煌の『觀經變』には『觀經』の本文にない説話の場面、「阿闍世太子の本生説話」が入っていることが指摘されている^⑨。このことについて塚本博士は、善導の『觀經疏』の中に取り入れられているだ

けでなく、特に『観経変』を用いる通俗説経をより効果的にするために、序分段に絵画として付加したものだ、といっている。このスタイルは莫高窟第四三一窟に示されているごとく、大変に重要なものである。

その一方で、曇鸞系の流れを受けた善導大師は慧遠のような理解は正しくないといひ、「弥陀仏国土観」に示す十三観は、心を静めて浄土を観察する善行（定善義）に相当し、散心による善行（散善義）にあたるとした。これは未来世の悪人や凡夫を救うために、釈尊が自発的に説示したものだ、という。中でも下三品は悪人が称名念仏によつて浄土に生まれることができるものとみたのである。

先にも言及したが、このことは阿弥陀仏の第十八願の力による称名念仏による往生を説いたものと、言つてよいだろう。塚本博士の言うところを強化したと思われる論文が、最近の『敦煌研究』に発義された。梁尉英氏の「『観経六縁変相釈説』がそれである。彼の言うところに従えば、『観経』の序文にあたるどころ、善導大師の『観経疏』の「序分義」に相当する部分が、莫高窟第二の九窟の壁画にみられるという。以下、この点について検討を加えたい。

二 観経六縁変相図とその位置

梁尉英氏の言うところを理解するためには、松本栄一氏の

『敦煌画の研究』に論じている、「敦煌画における各種変相の研究」中の「阿弥陀浄土変相及び観経変相」に言及する内容が、その前提として第二の九窟の壁画を、梁尉英氏は「観経六縁変相図とその位置関係として示した。図そのものとは不鮮明であるが、これと同じものが敦煌文物研究所編『中国石窟敦煌莫高窟(三)』の中に掲げられている。そこで、この『変相天意図』と『疏』（『経』の中に示す）との文を対照させておきたい。

『経』 悲劇を縁として（禁父縁）

そのとき、王舎大城に、ひとりの太子ありき。阿闍世と名づく。調達悪友の教に随順して、父の王の頻婆沙羅を収執し、幽閉して七重の室の内に置き、もろもろの群臣を制して、ひとりも往くことをえざらしむ、^①（第一扇第二画面 阿闍世幽禁父王。『疏』大正三七・二五四C）^②国の大夫人あり、韋堤希と名づく。大王を恭敬す。澡浴清浄にして、酥蜜をもつて麴に和し、用いてその身にぬり、もろもろの瓔珞のなかに蒲桃の漿をいれ、ひそかにもつて王にすすむ。^③（第二扇第二画面 夫人密奉王食。『疏』大正三七・二五四C）

そのときに、大王、麴を食し漿を飲み、水を求めて口にすすぐ、口をすすぎおわりて合掌恭敬し、耆闍崛にむかい、遙かに世尊を礼してこの言をなす「大目犍連はこれわが親友なり。願わくは慈悲をおこして、われに八戒を授けたまえ」と。^④（第三扇第三画面

因禁請法。『疏』大正三七・二五四c—二五五a)

④ ときに目犍連は鷹隼の飛ぶがごとくにして、疾く王のところに至る。日にかくのごとくにして、王に八戒を授く。世尊また、尊者富樓那を遣わして、王のために法を説かしむ。④第一扇第二画面 因請得蒙經法。『疏』大正三七・二五五b)

かくのごとき時のあいだ、三七日を経たり。王は妙蜜を食し、聞くことを得るがゆえに、顔色和悦なり。(大正一二・三四一a)

『經』 破れ去った期待（禁母縁）

④ ときに阿闍世、守門の者に問わく「父の王はいまなお存在せりや」と。ときに守門の人もうして言さく「大王よ、国の大夫人、身に妙蜜をぬり瓔珞に漿をいれ、もちて王にすすむ。沙門目連および富樓那、空より来りて、王のために法を説く、禁制すべからず」と。①第二扇第五画面 闍王問父音信。大正三七・二五五c)

④ ときに阿闍世、おの語を聞きおわりて、その母を怒りていわく「わが母なり、これ賊なり、賊と伴なり。沙門は悪人なり。幻惑の呪術をもつて、この悪王をして多日死せざらむ。すなわち、利剣を執りてその母を害せんと欲す。②第二扇第二画面 闍王執劍殺母。『疏』大正三七・二五六a)

④ ときにひとりの臣あり。名をば月光という。聡明多智なり。および耆婆と王のために礼をなしてもうさく「大王よ、臣は『韋陀論經』に説くを聞く。劫初よりこのかた、もろもろの悪王あるて、王位を貪るがゆえに、その父を殺害すること一万八千なり。いまだむかしにも無道に母を害することあるを聞かず。王いまこの殺

逆のことをなさば、刹利種を汚さん。臣きくにしのびず。これ梅陀羅なり。よろしくここに住すべからずと。

ときにふたりの大臣、この語を説きおわりて、手をもつて劍をおさえ、劫行してしりぞく。ときに阿闍世、驚怖し惶懼して耆婆に告げていわく「なんじ、わがためにせざらんや。」耆婆もうしてもうさく「大王、慎んで母を害することなかれ」と。③第二扇三画面 二臣切諫。『疏』大正三七・二五六a—c)

④ 王この語を聞きて懺悔し、たすけんことを求む。すなわち、劍をすて、とどまりて母を害せず。内官に勅語して深宮に閉置し、また出さしめず。④第二扇第四画面 放母脱于死難。『疏』大正三七・二五六c) (大正十二・三四一a—b)

『經』 罪なき罰の苦惱（厭苦縁）

④ ときに韋堤希、幽閉せられおわりて愁憂憔悴す。遙かに耆闍山にむかい、仏のために礼をなしてこの言をなさく「如来世尊、むかしのとき、つねに阿難をつかわし来らしめて、われを慰問したまひき。われいま愁憂す。世尊は威重にして、見たてまつることを得るに由なし。願わくは目連と尊者阿難とを遣わし、わがために相見せしたまえ」と。この語をなしおわりて悲泣雨涙し、遙かに仏にむかいて礼したてまつる。……①第一扇第四画面 世尊自来赴請。『疏』大正三七・二五七b)

いまだ頭をあげざるあいだに『そのとき世尊、耆闍崛山にましまして、韋堤希のこころの所念を知り、すなわち大目犍連および阿難に勅して、空よりして来らしめたもう。③第一扇第一画面

二經^②応夫人之請。『疏』大正三七・二五七b)

仏は耆闍崛山より没して、王宮において出でたもう。ときに韋堤希、礼しおわりて頭をあぐるに、世尊釈迦牟尼仏を見たてまつる。身は紫金色にして、百宝の蓮華に坐したまへり。目蓮は左に侍し、阿難は右に在り。^①『第一扇第五画面 世尊隱現王宮。』『疏』大正三七・二五七b) 釈梵護世の諸天虚空のなかにありて、あまねく天草を雨ふらし、もつて供養したてまつる。^④『第二扇第一画面 諸天聞法供養。』『疏』大正三七・二五七b)

ときに韋堤希、仏世尊を見たてまつりて、みずから瓔珞を絶ち、身をあげて地に投げ、号泣して仏にむかいてもうさく「世尊よ、われむかし何の罪ありてか、この惡子を生ずる。世尊また、なんらの因縁ありてか、提婆達多とともに眷属たる」と。(大正一二・三四一b)

『經』 淨土を求めて(欣淨緣)

「唯願わくは世尊、わがに広く憂悩なきところを説きたまえ。われまさに往生すべし。閻浮提濁惡世をばわがわす。この濁惡処は地獄・餓鬼・畜生盈満し、不善の聚多し。願わくは、われ未來に惡声を聞かず、惡人も見ざらん。いま、世尊にむかいて、五体を地に投げ求哀懺悔す。唯願わくは、仏日われを教えて、清淨業処を觀ぜしめたまえ」と。

そのとき世尊、眉間の光を放ちたもう。その光は金色なり。あまねく十萬諸仏の淨妙の国土みななかにおいて現ず。或は国土あり七宝合成せり。また国土あり純らこれ蓮華なり。(略)……

觀經變について(釋 舍)

① ときに韋堤希、仏にもうしてもうさく「世尊よ、このもろもろの仏土また清淨にして、みな光明ありといえども、われいま極樂世界の阿彌陀仏の所に生まれんと衆う。^①『第三扇第一画面 韋堤希別選所求(彌陀淨土)。』『疏』大正三七・二五八b)

唯願わくは世尊、われに思惟を教え、われに正受を教えたまえ」と。^②『第三扇第三画面 韋堤希請修別行(思惟・正受)。』『疏』大正三七・二五八b-c) (大正一二・三四一b-c)

『經』 仏のみ知りたもう(散善顯行緣)

そのとき世尊、即便微笑したもう。五色の光ありて仏のみ口より出ず。一一の光は頻婆沙羅の頂を照らす。そのときに大王、幽閉にありといえども、心眼さわりなくして、遙かに世尊を見たてまつりて頭面にて礼をなす。自然に増進して阿那含となる。

③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇

を勧進す。かくのごときの三事を名づけて浄業となす¹⁾と。〔②第四扇三画面 勸修三福〕。『疏』大正三七・二五九 a—二六〇 a 仏、韋堤希に告げたまわく「まんじいま知れるやいなや。この三種の業は過去・未来・現在の三世の諸仏の浄業の正因なり」と。
(大正二二・三四一 c)

『經』 アミダの国を願う（定善示觀緣）

仏²⁾、阿難および韋堤希に告げたまわく「諦に聴き諦に聴け。よくこれを思念せよ。よくこれを思念せよ。如来はいま、未来世の一切衆生の、煩惱賊のために害せられるもののために、清浄の業を説かん。よいかな韋堤希、ころよくこの事を聞えり。阿難よ、なんじまさに受持して、ひろく多衆のために仏語を宣説すべし。如来はいま、韋堤希および未来世の一切衆生を教えて、西方極樂世界を觀ぜしめん。仏力をもつてのゆえに、まさにかの清浄の国土を見ると、明鏡をとりてみずから面像を見るがごとくなるを得べし。彼の国土ゆえに、ときに応じて、すなわち無生法忍を得んと。
仏、韋堤希に告げたまわく「なんじはこれ凡夫なり。心想羸劣にしていまだ天眼を得ざれば、遠く觀ることあたわず。諸仏如来に異の方便ましまして、なんじをして見ることを得しむ」と。……
〔②第四扇第四画面 勸修得益〕。『疏』大正三七・二六〇 b—c ときに韋堤希、仏にもうしてもうさく「世尊よ、わがごときは、いま仏力をもつてのゆえに、彼の国土を見たてまつる。もし仏滅後のものもろの衆生等は、濁惡不善にして五苦にせめられん。いかにしてか、まさに阿弥陀仏の極樂世界を見たてまつるべきや」³⁾

と。〔①第四扇第二画面 仏説定善示觀〕。『疏』大正三七・二六〇 一二七〇 a (大正二二・三四一 c)

以上、『經』と『疏』とを対照してみたが、そこから導きだされてゐることは、第二〇九窟の壁画の様子と一致しているようにみえる。つまり、『往生西方浄土瑞応刪伝』の中に四十八人の西方願生者の事蹟を集録しているが、その一二番目に善導をとりあげ、「浄土変相を画くこと百鋪⁴⁾」と伝えることと符合しているようにみえる。しかし、『觀經』や『觀經疏』には説かれていない「未生怨因縁図相」が敦煌画の中にみられるため、松本栄一氏は善導流をもつてこれを律することは難いといわれ、『觀經變相』の形式として、

(イ) 浄土変相形式にして外縁を有するもの

(ロ) 浄土変相形式にして外縁を有せざるもの

(ハ) 浄土変相形式を採たざるもの⁵⁾

の三種をとりあげて説明を試みている。その中、についてハ) について、『觀經疏』序分義の疏釈内容が興味を引く。そこには次のようにいう。

又阿闍世というは乃ち西国の正音なり。此の地の往翻には未生怨と名づけ、また折指と名づく。

問いて曰く、何が故ぞ未生怨と名づけ、及び折指と名づくるや。答えて曰く、此皆昔日の因縁を挙ぐ。故に此の名あり。因縁と言う

は、元本父の王子息有ること無し。処処に神に求むれども、竟に得ること能わず。忽ちに相師有りて、王に奏して言さく、臣知れり。山の中に一の仙人有り。久しからずして寿を捨て、命終し已りて後必ず当に王の与に子と作るべしと。王聞きて歎喜す。此の人何れの時にか捨命する。相師、王に答う。更に三年を経て命終すべしと。王言く、我今年老いて国に継祀なし。更に三年を満つるまで何に由りてか待つべきと。王即ち使いを遣わして山に入らしめ、往きて仙人に請して曰わしむ。大王子無く、闕けて紹繼なし。処々に神を求むるに、得ることあたわざるに能わざるに困しむ。及ち相師有りて大仙を瞻見るに、久しからずして捨命して、王の与に子と作るべしと。請い願わくは大仏、恩を垂れて早く赴きたまえと。

使人教えを受けて山に入り、仙人の所に到りて、具に王請の因縁を説く。仙人使者に報えて言わく、我更に三年をへて始めて命終すべし。王の即ち赴けと勅するは、この事不可なりと。使い仙の教えを奉けて、還りて大王に報ずるに、具に仙の意を述ぶ。王曰く、我はこれ一國の主なり。所有人物みな我に帰属す。いま故に礼をもつて相屈するに、乃ち我が意を承けざるや。王更に使者に勅す。卿往きて重ねて請ぜんにもし得ずば、当に即ち之を殺すべし。既に命終し已りなば、我が与に子と作らざるべけんやと。使人勅を受けて、仙人の所に至りて、具に王の意を道う。仙人使いの説を聞くとも、意にまた受けず。使人勅を奉けて即ち之を殺さんと欲す。

仙人曰く、卿当に王に語るべし。我が命未だ尽きざるに、王心口

をもて人をして我を殺さしむ。我もし王の与に兒を作らば、還心口をもて人をして王を殺さしめんと。仙人此の語を道い已りて即ち死を受く。既に死し已りて、即ち王宮に託して生を受く。其の日の夜に當りて夫人即ち有身すと覺ゆ。王聞きて歎喜す。天明けて即ち相師を喚びて、もて夫人を觀ぜしむ。是男なりや是女なりや。祖師觀已りて王に報えて言わく、是の兒は女にあらず。此の兒王において損あるべしと。王曰く、我が国土はみな文を捨属すべし。縦い損するところ有りと、吾また畏れ無しと。（略）……落して地にあらんに、豈死せざるべけんや。吾また憂うることもなく、声も露れじと。

夫人即ち王の計を可とし、その生む時に及びて一ち前の法のごとくす。生み已りて地に墮つるに、命便ち断えず、ただ手の小指を損す。因りて即ち外人同じく唱えて折指太子と言う。……（傍点筆者）

このようなまとまつた説話が『觀經』の序文の内に加えられているし、さらに傍点の部分に注意をはらいながら、善導大師の『觀經疏』をみると、(a)「父王の幽閉」から「釈尊の没山出宮」までの相図に加えて、(b)「父王の宿殃」（未生怨因縁図相）が加えられ、(c)十六觀（あるいは十三觀）の外縁に示されるものがあがつたとすれば、これまでみてきたように、梁尉英氏が「觀經六緣變相釈説」に指摘する善導大師の『疏』を図示化したといつてよいかも知れない。

三、結びにかえて

以上のごとく、松本博士や塚本博士が指摘されたのは別の「観経変相」が壁画として画かれており、梁尉英氏のいうごとく第二の九窟の描図の一部が善導大師の「観経疏」の内容と一致するものであるならば、慧遠や吉蔵の系統とは異なつた、曇鸞や道綽の系統、ことに善導大師のいうところの内容が具現化したことになるう。だが、莫高窟第二〇九窟の中心は阿弥陀仏ではなく、弥勒菩薩だという説もあるので検討すべき問題をもっている。いまは注目にあたいる論文が発表されたことと、その紹介とを兼ねて報告するものである。

- 1 日本の著作・論文に限定し、その主要なものをあげると、
 - (イ) 松本栄一著『敦煌画の研究』、一九三七年。
 - (ロ) 塚本善隆著『唐中期の浄土教』、一九三三年。
 - (ハ) 『塚本善隆著作集』四、一九七六年。
 - (ニ) 中村興二稿「西方浄土変の研究」〔『日本美術工芸』所収。同稿「わが国の浄土変相と敦煌」〔敦煌文物研究所編『中国石窟敦煌莫高窟三』、一九八一年。
 - (ホ) 岡崎敬稿「大谷探検隊と敦煌莫高窟」〔西域文化研究、第二〕一九五八年。
- 2 『昭和定本日蓮聖人遺文』、五七五頁。
- 3 大久保道舟著『道元禅師伝の研究』二九七頁以下。
- 4 『定本教行信証』、一六四頁以下。

5 註④一九九頁以下。
6 註④二〇〇頁以下。

7 塚本善隆稿「浄土変史概説」〔『仏教芸術』26〕、三六頁。
8 松本栄一著『敦煌画の研究』四五頁以下。

9 梁尉英稿「観経大縁変相図釈説」〔敦煌研究〕一九九八年、二期）二〇一—二八頁。

10 大正蔵五一卷一〇五b—c。

11 註⑧五頁。

12 大正蔵三七卷二五三b—c。

（キーワード）善導、『観経疏』、莫高窟壁画

（高田短期大学教授）